



磯辺シャークス [千葉市]

“笑顔”から“強豪”へ 3年計画最終年 めざすは先輩越え!

全国規模の「くりくり少年野球選手権」3位のほか、昨年だけでも11大会を制した磯辺シャークス。そんな強豪も、笑いが絶えない練習風景はよくある普通の学童チーム。だが、選手育成システムや野球の取り組みは他チームとは違う。その発端は、練習中に感じる和やかな雰囲気。選手の表情が強豪と呼ばれるまでの道筋だった。

文・写真◎鶴田成秀

失敗を恐れずノビノビと

「強豪」と聞けば、厳しい指導や練習」というのがイメージされるが、磯辺シャークスの選手や指導者の顔からはスマイルが絶えない。

「失敗していいんだよ。怒ったりしないだろ? ガツカリはするけど(笑)」と大木学監督は冗談を交えながらチームの雰囲気と和ませる。そして、選手と話すときは必ずしゃがみ込み、目線を合わせる。そんな監督が作り出す雰囲気が入部の決め手になることも多い。体験練習に参加したとき「楽しそうだった」「練習の雰囲気良かった」と入部を決めた理由を話す選手たち。父母の間にも「監督が上から物を言ったりすることがない。その指導が良いなと思ったので」など、支持者が多い。「厳しくしすぎると、選手たちは思い切ったプレーができなくなる」と考える大木監督は、失敗を恐れず、ノビノビと野球ができる環境を作り出している。その象徴が、練習や試合時に見

TEAM DATA

【チーム名】磯辺シャークス
【代表者】木村義昭【創設】1977年
【チーム所在地】千葉市美浜区
【チーム構成(2011年)】
14名(Aチーム) 16名(Bチーム)
18名(Cチーム)
【主な戦績】
2004年 千葉市秋季中央大会優勝
2006年 関東学童千葉県大会3位
2009年 千葉市 高橋由伸杯争奪戦 準優勝
2010年 くりくり少年野球選手権大会3位
関東学童大会優勝
※戦績は全てAチーム

大木学 [Aチーム監督]

おおくま まなぶ ● 1968年生まれ。千葉県袖ヶ浦市出身。小学校から野球を始める。小中は軟式、高校は硬式でプレー。2003年、息子の入部を機にコーチに。息子が卒業後の06年、Cチーム監督に就任。以降、選手の進級に応じてチームを持ち上がり、09年に再びCチーム監督に。そして11年、2度目のAチーム監督となる。



せる笑顔だ。

かといって、弛緩しているわけでもない。「厳しくするときもあります」と話す大木監督は、軽率なプレーや態度をしたときはしっかりと叱る。そのせいだろう、あいさつの声は一样に大きく、整列は素早くきれいに一直線。和やかな雰囲気でも、チームの動きは引き締まっている。活動する千葉市美浜区は、千葉ロッテマリーンズの「QVCマリンフィールド」があるほか、人口約15万人の東京ベッドタウンとして知られる。小学校の数は20校あり、子供も多く、家庭などの練習場所も豊富。環境にも恵まれ、磯辺シャークスには現在、48名が所属している。

部員が増えるのは喜ばしいが、指導が全員に行き渡らなくなる可能性も高まる。そこで10年ほど前から始まったのが、3年計画。学年ごとに、A(6年)B(5年)C(4年以下)の3つのチーム単位で練習も試合も行う。そして各々のチームに専属の監督とコーチを配し、選手の



「思い切ったプレーができる 雰囲気作りが大事」。

練習中は笑顔が絶えない。この雰囲気は部員増、そして強豪へとつながった

進級に合わせて監督もそのまま持ち上がる。つまり、3年掛かりで選手育成に励んでいるのだ。増えたのは選手ばかりではない。各チームには、部員数と同数のコーチが在籍。部員のお父さんは基本的にコーチ登録しているのだ。「息子がいたときにコーチを始めて、卒業後も惹きこまれてしまつて」と、新6年生のAチーム大木監督。父母の協力もあり、練習時のボール拾いなどのサポート体制は万全で、大人数で行う練習効率は必然的に上がる。その成果で昨年のAチームは、全国規模の「く

りくり大会」で3位に輝いた。笑顔が部員を誘い、3年計画のもとでじっくりと育つ。イメージにそぐわない笑顔は、強豪になるまでの道筋だった。**成果が出始めた最終年**
この4月からAチームとなつた新6年生は昨年、県3位に輝いている。だが、Aチームとなつて初の公式戦前日は、練習試合でまさかの2連敗。それでも勝敗がすべてではない。スコアボードには記されない部分で確実に成果を挙げている。
学年別に活動をしていても、

基本的な流れは変わらない。重視しているのは、野球の前後だ。「最近体が硬い子が多い」と話す大木監督は、Cチームの頃からアップを入念に行っている。練習開始からキャッチボールまでに掛ける時間は40〜50分。その間、屈伸や伸脚などの静ストレッチ約30種類、ランニングやダッシュなどの動ストレッチ約20種類を行う。「ケガをしない体を作るため、家でもストレッチをするように指導をしている」と話す大木監督だが、強制したり柔軟性のチェックはしていない。その答えはおのずとグラウンドで出る。「痛い！」と声を上げてストレッチを行いながらも、総じて選手たちの体は柔らかい。Cチーム当初は前屈などで体が地面に着かなかつた選手も、今では着くようになった。4年時から指導している監督の考えや指導が選手に伝わり、しっかりと身になっている証だ。
練習や試合後にも力を注ぐ。試合が終わると選手たちはベンチとノート持って座り込み、「選

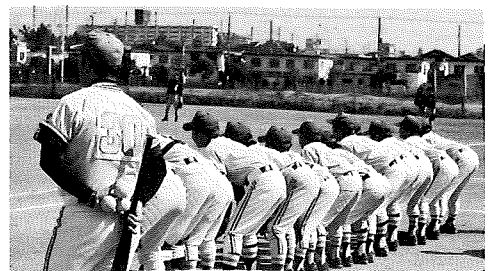


練習時に見返せるよう、各自のノートはベンチに

反省会で意見を出し合う選手たち



手に考えさせる」ことが目的で始めた反省会を開く。キャプテンが中心となり、良かった点、悪かった点の意見を出し合い、それから全員の意見をまとめて監督に報告する。
でもそこは小学生。「エラーが多かった」「四球が多かった」など意見は具体性を欠くことが多い。そこで監督は、なぜ四球が多くなったのかを問いかけ、さらに考えさせる。それから「今日は寒いだろ? だから指先を温めてから投げないとダメなんだよ。あと、軸足に体重が乗り切る前に投げていた。だからボールが安定しないんだよ」といった具合に答えを与える。練習では笑顔が絶えない選手たちも、このときの眼差しは真剣。各自のノートはベンチに置かれ、いつでも見返せるようになっている。「Cチームのときより意見の数は増えましたし、選手もプレーを理解してきています」と大木監督が手応えを口に



試合前に相手ノックを見る磯辺ナイン。整列は素早くきれいに一直線、和やかな雰囲気でも動きは機敏

すれば、選手も「反省会をしたほうが悪かったことが理解できる」と語る。
反省会では、試合に出場しなかった選手が発言することが多い。「出場していない分、反省会で何か言ってるうって思ってるみたいですよ」と大木監督は笑みを浮かべた。そうした、野球の前後の強化が、個々のモチベーションと向上心を高めているのだらう。もちろん、チームとしての志も高い。今年の目標は、「全国大会出場」という監督に対して、選手たちは「全国優勝!」と大きな声を張り上げた。
そして、練習試合で連敗を喫した翌日。初公式戦を勝利で飾ると、翌週の2回戦も突破。まずは、地区大会制覇へ。そして、昨年「くりくり大会」3位の先輩越えへ。着実に成果を挙げながら、今年も3年計画、最終年がスタートした。